波紋

特定非営利活動法人
教育活動総合サポートセンターだより
「波　紋」　第５号
発行人　井口　衛
題字デザイン・山口正勝

発行所　教育活動総合サポートセンター
〒213-0033　川崎市高津区下作延1219-104
TEL・FAX：044-877-0553
E-mail：support0731@luck.ocn.ne.jp
ホームページ：http://www16.ocn.ne.jp/~snmi/
印　刷　西桜印刷株式会社

設立して5年目を迎えることができました

皆様のあたたかいご指導ご支援は、わたくしたちの大きな力、大きな支えです。
本年度も多くのご示唆をどうぞよろしくお願い申しあげます

NPO法人　教育活動総合サポートセンター
理事長　井口　衛

「子たちに力を・子たちと夢を」ともに学びともに生きていきたい。この紙面にある子どもたちの夢と願い、保護者の熱い想いをしっかりと受けとめ活動するスタッフの姿に頭がさがります。お世話になった教育界に少しでもお役に立ちたい。同じ志を持った友と友。30人のスタッフが現在では理事、活動会員は120余人となり各方面で力を合わせています。創刊号の編集後記に「小さな波紋が広がってサポート活動の波が力強くわき起こる日を確信して、メンバー一同一歩ずつ着実に努力を続けます」と、5年目を迎えた現在、多くの皆様に支えられお力をいただきながら輪が広がってきている。わたくしたち共通の想いです。さて、19年度の事業も別面に報告がありますので省きますが新事業として「新しい学校づくり☆川崎塾」の研修講座を開校いたしました。48人が参加し講師陣のお力もあり大変有意義であったとのアンケートの中でこの2月に終了いたしました。他の事業につきましてもすばらしい成果をあげて終わることができました。（別面参照）。

そして忘れてはならないことは、ひとつひとつの事業は単独でできるものではなく、市教育委員会、総合教育センター、生涯学習財団、退職校長会、各校種校長会はじめ、関係諸機関との強い連携のもとにあることを一同常に心したいものです。

「川崎の教育はすばらしいですね。まとまりと力を感じます」1月30日に文部科学省の委託事業について視察に見えました藤城財務主計官のことばです。（北崎文科省児童生徒課長補佐・岡本同第1係長も同行）、うれしくありがたいひとときでした。昨年9月には日本青年会議所関東地区神奈川ブロック協議会が川崎を会場に開催され「かながわ力大賞（三団体）を受賞いたしました。市社会福祉協議会、東京応化科学振興財団（2年目）より多大な助成もいただきました。多くの賛助会員・賛助団体のご支援とあわせ厚く御礼申しあげます。多摩川新聞、タウンニュース（高津版）も紙面をいただきました。20年度も別面にありますが組織の充実に努め初心を忘れることなくお互いに力を合わせたいと考えております。

終わりになりましたが設立以来、中心になりご活躍された佐々木事務局長が教育委員長に就任されました。後任の宮田事務局長（前教育委員長）を核に本年度もともに喜びを分かち合い活動を進めます。「志・和・絆」感謝する心で。

20年度活動方針・事業計画

設立の理念に基づき、各事業がより効果的、具体的に活動できるよう組織の充実を図っていきたい。

1．活動方針

①家庭・学校・地域及び教育関係機関等との連携をもとにして、計画した事業を着実に実施し、学校教育活動の充実発展を支援する。

②一人ひとりの児童・生徒に誠意を持って対応することを使命として、子どもが目標を持ち、生きる力を身に付けるよう支援する。

③組織力の充実と諸活動の充実を目指し、活動会員の補充・充実を図る。

2．事業計画

前年度末の理事会において組織の充実が提案され承認された。各事業が円滑に推進できるよう理事の増員、事業内容の充実を図り定款の内容変更も進めていきたい。

(1)　管理・運営部

①青少年の家　管理運営事業
生涯学習財団と合同事業体として管理運営に当たるが、市民の要望に応え大学院生を迎え若い力を補充する。

②教育会館　管理相談事業
会館の管理と同時に教職員の多用なニーズに答える相談活動を充実する。

③学校図書館開放事業
休日や長期休業等を活用し学校図書館を児童・生徒及び市民に開放するための管理運営にあたる。

④教育修繕ボランティア事業
子ども文化センター等の施設修繕ボランティア事業の対応にあたる。

⑤麻生ゆうゆう園芸事業
麻生ゆうゆう施設に付随する園芸施設の対応にあたる。

(2)　指導・援護部

①不登校者に対する教育相談適応指導事業
不登校者に対してサポートセンターを学習・活動の場として提供し、教育相談・学習指導・進路指導等の支援活動を年間を通して実施する。

②不登校者親の意見交換会
不登校の子どもがいる親、不登校に関心のある親が互いに意見を交わし学校復帰の方策を探る。年間3回開催。

③不登校パネル
不登校に関心がある親、市民、教師等が時間をかけて建設的な討論をする。

④体験活動
不登校に陥った子どもに社会見学、体験活動等を経験させ、友達の輪を広げたり、学校復帰の手段にしたりする。

⑤ふれあい宿泊体験
これまで、この事業で友人関係の改善や学校復帰の早期化ができたので、本年度は年間5回を計画。

⑥学習支援事業
各教科学習の基礎基本の補修や学習不振に悩む小・中学生及び高校生を対象にした学習支援を通年実施する。

⑦特別支援教育

最近、NPOへの来所者が急増している。定款に事業内容として追加する。

⑧日本語指導
最近、NPOへの来所者が急増している。事業として充実する。

⑨キッズセミナー
例年通り夏休みに5日間、40コマを計画。

⑩サイエンスキッズセミナー
水曜日は青少年の家、土曜日は宮ノ下事務所で実施。

(3) 研修・研究部

①文部科学省委託研究
不登校児童・生徒の学校復帰プログラム開発研究を続行する。
研究発表は3月26日

②輝け☆明日の先生事業
教員を目指している大学生等を対象に土曜日等を活用して実施。年間15回。ゼミナール6回を予定。

③新しい学校☆教師塾
教職員の大量退職、大量異動による混乱を未然に防止し、学校改善を図る教師塾。

④学習サポーター派遣事業
前年度に加えて、特別支援が必要な児童・生徒が在籍している学級で希望する場合、年間を通して大学生を派遣する。

⑤その他
新設校への教育相談員派遣、放課後学習支援の新設に伴う指導者派遣、初任者研修指導員派遣等が予定されている。

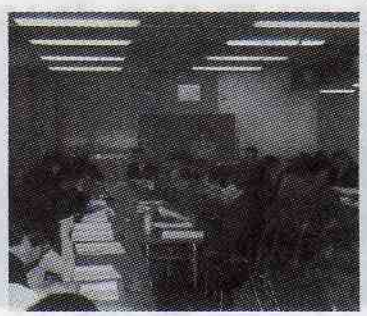
不登校への対応におけるNPO等の活動に関する実践研究事業中間報告会

文部科学省委託事業

17・18年度の2年間を当センターでは文部科学省より標記の研究委託を受け、スタッフ一同その研究に取り組んできた。発表会は、昨年3月31日(土)に実施したところである。

引き続き19・20年度もその研究が委託され、その中間報告会が20年3月26日(水)に教育会館で行なわれた。

全体会・分科会・全体会の順に行なわれ、はじめの全体会では研究の報告を、その後分科会（小学校部会・中学校部会にわかれて研究討議）そしてまた、全体会で各分科会の内容を報告、質疑応答の後、日本女子大教授鵜養美昭先生の指導講評で幕を閉じた。参会者は小中学校の現職の先生を含めて154人余であった。



新しい学校づくり☆川崎塾

平成19年度の新規事業として総括教諭・中堅教諭を対象とした研修会を企画し開催した。総括教諭・中堅教諭は、校長・教頭を支える学校運営の要として重要な立場である。「新しい学校づくり☆川崎塾」と命名し、9月より2月まで、8回の研修会と協議会を開催した。48人の参加者があり盛況であった。

「輝け明日の先生の会」開設

総合教育センターの委託で昨年度から始めたこの会は、「新しく川崎の教員になる人達が川崎の現場の実情をあらかじめ知っておき、学校に配属された時から教育活動を出来るだけスムーズに実践できるようにすること」を目的としています。今年は、講話30本（1回で2本）、ゼミナール7回（1回で2時間）をセンターの第2、第4土曜開館日を中心に実施しました。参加会員数は90人ほどでした。

小学校部会

―A子さんにかかわった10か月―

学校で多くの友から暴言や不快な行為を連続的に受け自宅で怯え震えさえ生じるようになってしまった。

○安心できる場、心の安定
○遊びを通した心のふれあい
○学力の向上と自信の回復

そのことを主眼として取り組みを開始した。早急な克服は決して容易ではない。いろいろな難問に直面したが、サポートセンターは安心して復学していくことを最大の目標としている。部会で多くの教師の体験にもとづいた注目すべき発言が続いた。不登校打開の道は平坦ではないが教師の情熱と連携があるかぎり光明は常に消えることはない。

サポーター派遣事業

19年度の実績（3年目）

校種	（小）	（中）	（計）
要請校数	89校	16校	105校
派遣校数	85校	15校	100人
派遣人数	178校	20校	198人

（内、特別支援143人、教育支援55人）

現在、48大学から、学生195人、教員OBや教育支援経験者、25人が登録している。

中学校部会

「いじめを克服し学習意欲が高まったF子」「学習の喜びを感じつつあるG子」

以上2事例が報告された。協議内容を要約すると次のようになる。

不登校になった要因は個々により多岐にわたるが、一人ひとりにあったカリキュラムを作成し、学習を通して心の安定を図ることは極めて大切である。さらに、学習の前後にカウンセリングを行い、共感的に受容し、適切なアドバイスをしていくことも欠かせない。また、保護者・担任・生担・学校カウンセラー等との連携により、その生徒をより深く理解し指導法を模索していくことも重要である。

川崎市青少年の家指定管理受託

〈エコチャレンジクラブ〉

多摩川のモツゴ放流にはじまり、エコクッキング、科学実験など身近な環境についての体験学習を重ねてきている

〈ほのぼのスクール〉

4泊5日小中高生が青少年の家に宿泊しながら通学し自己の再発見、相互理解のすばらしさや大切さを学んでいる

学びを楽しむ子たち

できるようになったこと

わたしは、去年の12月からサポートセンターへ行くようになって、いろいろなことができるようになりました。

勉強を教えてもらって、とくに算数がよくわかるようになりました。でも勉強だけではなく、ほかのこともたくさんできるようになりました。

たとえば、はじめて一人でバスに乗ってサポートセンターへ行くことができました。先生がほめてくれて、うれしかったです。とても自しんがつきました。ちがうところへも、一人で行ってみたくなりました。

それから、サポートセンターの先生や友だちといっしょに青少年の家へおとまりに行きました。それまでは夜一人でねられなかったのに、一人でねられるようになったり、自分からお皿や、ぬいだ服をかたづけられるようになりました。

お友だちや先生にたすけてもらったり、いっしょに料理や遊ぶことができて、楽しかったのでまた行きたいです。

（小３・Ｍ・Ｋ）

今後も続けてがんばる

去年の10月から毎週火、木に来て、算数と国語をいつも友達三人といっしょにやっています。たまに、友達二人と先生とやる時もあります。

サポートセンターに来てから、算数のわり算が少しだけ得意になりました。

わたしは、もともと国語が好きでサポートセンターに来たらもっともっと漢字が得意になりました。

Ｉ先生に算数や国語を教えてもらったので、授業では少し自信を持って手をあげられるようになりました。Ｉ先生はクリスマスになると「はい、クリスマスプレゼント」といって、すてきなプレゼントをしてくださいました。また、勉強をしていて、つかれたりしていると、アメなどを持ってきていろいろはげましてくださいます。こんなふうにやっているサポートセンターは、「いい所に来て、よかったなあ～」と思っています。これからも続けたいと思っています。

（小５・Ｋ・Ｋ）

女優をめざして

私の将来の夢は、女優になることです。

小さいときからずっと憧れていて、小学生のときから演技や、ダンスを始めました。

レッスンはきびしく、なかなか仕事もきまらないけれど、自分の好きなことなのでがんばれます。親に私の好きなことを好きにやらせてもらえるかわりに、私はずっとしていなかった勉強をするためにサポートセンターに来ました。最初は苦手であまり好きではなかった勉強もだんだんできるようになってきて少しずつ好きになりました。

私は４月から中学３年生です。まだきちんと進路も決まっていないけれど、高校や演技を勉強する学校に通って、高卒の資格は取ろうと考えています。そのためにも今年１年がんばって勉強して、進学して、女優の夢もがんばって、学校に行かなくても、何にでもなれるということを、いろいろな人に知ってほしいです。

（中２・Ｍ・Ｙ）

「多方面の支援を受けて」

知的障害を伴う自閉症児のわが娘は、現在サポートセンターをフル活用している一人だ。

まず、小２の９月から特別支援教育サポーターの派遣を受けている。通常級で多くのクラスメイトとともに授業を受けている娘は、言語力の弱さから、全体への口頭指示の理解や条件文の読み取りでつまずくことがあるが、サポーターの方に説明を適時補足していただくことで正しい理解が得られ、どうにかついていっているようだ（もちろん学校の先生方や友達の理解や協力のおかげも大きい）。結果として安定した学校生活が営め、問題行動の軽減につながり、学級全体にとってもプラスになっていると思う。

また下校後に週２回、サポートセンター内で補習を受けさせていただいている。娘は前述の特別支援教育サポーターとして学校でもお世話になっているＳ先生に担当していただいているので、学校の担任の先生と連携の上で、学校の授業に即した指導が受けられることが魅力だ。

さらに、青少年の家で行なわれる宿泊学習にも参加している。センター内に掲示されていた宿泊学習の様子を収めた写真を見て興味を抱いた娘は、それまで何度チャレンジしてもクリアできなかった親の添い寝をあっさりと卒業した。そればかりか「青少年の家でみんなと過ごすために必要だから」と諭すと、さまざまな生活課題をこなすようになってしまった。

このように、子どもたちのために多岐にわたり愛情を持って労してくださっている先生方お一人お一人に深く感謝している。

（小３母・Ｍ・Ｔ）

ＮＰＯで得たもの

私は、ＮＰＯで色々なもの学びました。

例えば、人の温かさを知りました。ＮＰＯの先生たちは、とても優しい人ばかりです。時々さわぎすぎて叱られてしまうけど、前とちがって、「ちから」で片づける事が無くなりました。

きっと私の心は冷たい氷のような心から温かくて明るいオレンジ色に変わったのかもしれません。

前は、平気で人の悪口を言って友だちをイジメていたけど、今はあまり、悪口を言わなくなりました。

ＮＰＯで人の優しさを知ったからだと私は思います。

それと、人の気持ちを知ることもできました。

ＮＰＯでは、人の優しさ、自分の心を知ることもできました。

ＮＰＯにきて、得たものはたくさんあっても、損したものは、一切ありません。

私は、そんな優しい心を持ったＮＰＯの先生を見本にして生きていきたいです。

Ｋ先生みたいに人の話を聞けること。

Ｔ先生みたいに時には優しく時には厳しくできるようにすること。

Ｋ先生みたいにいつも笑って過ごすこと。

三人の先生以外の先生も見本にして、未来に進みたいです。

私の夢は刑事。

刑事になるまでは、すべての見本をクリアしたいです。

そして、先生たちが私にくれたすべてのものを色々な人に話して、「雲」の願いを叶えたいです。

一つ、人と人との争いを無くすこと。

一つ、人の心をキレイな色にすること。

一つ、平和な国にすること。

三つの願いを抱きながらＮＰＯに通い続けたいと思っています。

（中２・Ｙ・Ｍ）

気づくことの大切さ

「今日は具合が悪いの」とたずねると、コクンと小さくうなづく生徒がいた。集中力がなくなっているのに、無理して問題を解き続けようとする生徒がいた。

多くの子どもたちと触れ合う中で、彼らの小さなサインがたくさん私に送られていた。

もしかしたら、今までにめぐり会った子どもたちの全てのサインをキャッチすることはできなかったかもしれない。

子どもたちのサインを見落とさないように、「気づくこと」を大切にしたい。そして、私も温かい愛情のこもったサインを送り続けていきたい。

（サポーターＫ・Ｔ）

教育相談活動にあたって

開設5年目を迎え、皆様のご要望に添えるように担当者一同努力を重ねています。

市民や関係機関の方々のご理解、ご協力をいただき、平成19年度の当サポートセンターに、来所された相談件数は、111件と前年より25件増加しました。

相談内容は、学習が思うように進まない、学校に行きたいが授業がわからないので行きしぶっている、学校に行ってないので学習が遅れてしまったなど、主に不登校不適応・特別支援教育に関することが多く、子どもや保護者一人ひとりが、いろいろな思いを持って相談に来所されます。

このような学習関係についての相談では、担当者が一対一で、子どもが持っている勉強をしたいという気持ちを受けとめ、子どもができるところから、こども自身の想いを大切に、本人にあった教材を用いて学習活動を行います。

この個別学習活動のプロセスから、子どもは自分でできたという達成感、満足感から学習意欲が高まり、自分に対する自信を持つようになり、日常生活全体に行動の広がりが出てきます。当サポートセンターでは、一人ひとりの子どもに応じた個別カリキュラムにもとづいてきめ細かな学習支援を行っています。

例えば、Aさん（中学校3年）は、「いままで6年間学校へ行かなかったが、高等学校に行きたいので勉強をしたい」ということで来所。「勉強はしていないので、小学校の初めからしたい。」という希望で、小学校1年の算数の教科書から学習を開始しました。そして、一歩一歩着実に学力を身につけて行く中で、数学の学習に自信がついて、さらに、英語の学習も加えて学習活動が一層充実していきました。

その結果として、進路について中学の担任に相談し高校を受験合格、サポートセンターでの勉強を嬉しそうにふり返って学習担当者に話していました。

（指導援助部長・片山世紀雄）

さらなる発展を祈りつつ

はやいもので活動会員・賛助会員の皆様の温かいご協力とご支援をいただき「サポートセンター」の活動も5年目を迎えることができました。

最初は不登校の子どもたちの学校復帰を目指した学習支援を中心とした細々とした活動でしたが、平成17年度に文部科学省の「実践研究事業」の研究委託を受け、学校や保護者・関係機関との連携を図る活動を進めることにより、多くの子どもたちが学校復帰を果たすことができました。

これらの成果を多くの方々から評価をいただき研究冊子としてまとめ研究報告会を実施することができました。

これまでの学校復帰を目指した活動も大切であるが、予防的活動が重要であろうと、学級担任の補助として教員を目指している大学生等を「学習・特別支援教育サポーター」として市内小中学校への派遣事業、「輝け★明日の先生の会」等の事業を拡大することができました。今後ともご支援ご協力をお願いいたします。

（前事務局長・佐々木武志）

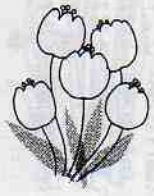
編集後記

◆春の嵐が襲来、4月8日に残り少ない桜の花びらが全て散った。記録的な低気圧の発生は地球温暖化の影響だろう

◆サポートセンター設立の大きな理念であり、活動である学校復帰支援への取り組みが文部科学省に高く評価され、中間報告会には現役の先生方が200人近く参加された。本発表に向け、全員一丸となり取り組みたい。財務省の主計官も招待したいものだ。

◆有能、博識である佐々木事務局長の後任を拝命した。微力ではあるが、各種事業の推進調整に、他機関との渉外対応に努めていきたい。物心両面にわたるご理解とご支援を期待している。

（事務局長・宮田　進）



財政の状況（平成19年度）

平成19年度における収支は、つぎの通りです。

（平成20年3月5日現在）

収入

項　目	金　額（円）
A 繰越金	3,028,443
B 賛助会費	5,080,000
C 会員年会費	540,000
D 運営協力金	1,749,546
E 運営事務経費	954,000
F 雑収入	95,959
合　計	11,447,948

支出

項　目	金　額（円）
A 給与・旅費	2,723,445
B 賃借料	1,958,235
C 水道光熱・事務所管理費	622,508
D 消耗品・事務用品費	430,331
E 通信費	237,673
F 印刷費	100,800
G 研修費	84,618
H その他	105,571
合　計	6,263,181

19年度は、多くの皆様のご支援・ご協力をいただき、財政事情がだいぶ好転いたしました。収入が少なく支出が多い4月・5月も、繰越金があるおかげで無事切りぬけることができました。子どもたちへのかかわりをより充実したものにするために、さらに財政面の安定をはかりたいと思います。

今後とも、ご支援のほどよろしくお願いいたします。